

謝 辞

スペイン語の歴史との出会いは、今から約9年前にさかのぼる。当時、東京外国語大学のスペイン語学科で開講されていたスペイン語史の授業でのことであった。難解な原文に戸惑いながらも、現代スペイン語の様々な局面を解く鍵が言語の歴史の中に見い出せることや、どんな変化も理由なく起こるわけではなく、体系をなす他の要素との関係の中で説明できる場合が多いことを学び、そのダイナミズムに漠然とながら興味を持ち始めたのがきっかけであった。

当初に覚えたそうした興味は、言語の歴史の奥深さに何度となく圧倒されながらも、その後も絶えることなく今日まで続き、ここに論文という形で一つの区切りを迎えることができた。時制形式の歴史という決して簡単には扱えない、ましてや外国語としてスペイン語を学ぶ筆者の手には余るテーマであったにもかかわらず、何とかここまでこぎつけることができたのは、手探りの状態にあった筆者を温かく見守り、導いてくださった数多くの方々のお陰である。

本論文につながるそもそものきっかけとなった前述のスペイン語史の授業でお世話になって以来、卒業論文、修士論文と今日まで長きにわたりご指導いただいている寺崎英樹先生、また、新しく語史の授業を担当された折、筆者の聴講をこころよく許して下さい、以来多くのご助言をいただいていた高垣敏博先生、筆者の関心領域の時代の作品の読書会を設けてくださり、また作品のコンコーダンスを作ってくださいました川上茂信先生、東京外国語大学の先生方、スペイン語学のおもしろさや難しさを教えてくださった原 誠先生、文学作品の精読の大切さと楽しさを教えてくださった故 牛島信明先生、筆者の拙いスペイン語の質問にいつも丁寧に応じてくださった Víctor Calderón de la Barca 先生、博士論文の書き方について多くを学ばせていただいた西村君代さん、日頃から貴重なご意見、ご助言をくださる東京スペイン語学研究会のメンバーの方々、SELE のメンバーの方々に心より感謝の意を表したい。最後に、丁寧に拙文を読んでくださり、審査では多くの貴重なコメントを

いただいた審査委員の先生方(東京外国語大学の寺崎英樹先生、高垣敏博先生、富盛伸夫先生、黒澤直俊先生、東京大学の土田博人先生)にはこの場をお借りして重ねてお礼申し上げます。

2004年3月

鈴木 恵美子